

アルケイア―記録・情報・歴史―  
第三号 二〇〇九年三月 六九―九四頁  
南山大学史料室

ヒルシュマイヤーの業績  
―多領域活動への視点―

広  
瀬  
徹

Insights into Multidirectional Achievements of  
Johannes Hirschmeier (1921-1983)

HIROSE Toru

*archeia: documents, information and history*

No.3 March, 2009 pp.69-94

NAnzan University Archives

## ヨハネス・ヒルシュマイヤーの業績

―多領域活動への視点―

広瀬 徹

はじめに

私は四年前から南山大学に実務家教員として奉職し、講義はビジネススクールを中心に行っております。赴任当初から気になっておりましたことは、かつて本学の学長を務められたヨハネス・ヒルシュマイヤー先生が、経営史を専門領域とされていたことです。しかも日本経営史というジャンルで、一九七〇年代から優れた研究業績を遺されていることにも驚きました。先生は経営史学という学問分野での活動のみならず、幅広い領域で活躍された方です。ありますので、その全体像を捉えるべく、本学内に保管・保存されている資料を探索いたしました。本稿は、その作業報告であります。

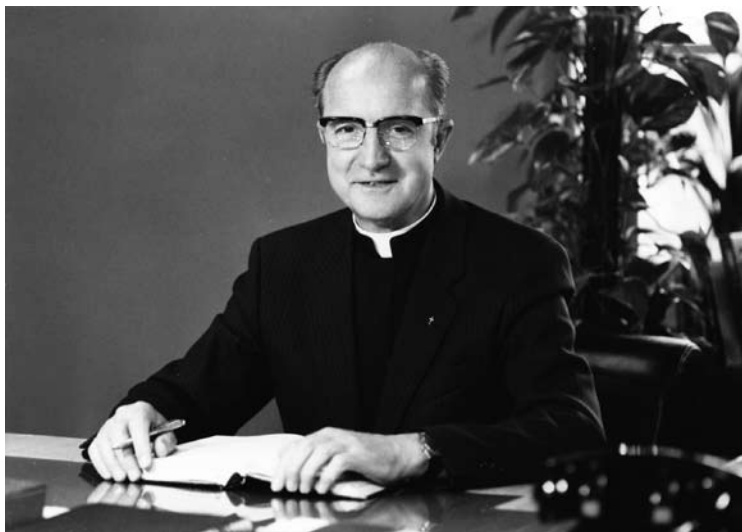


写真1) 修道者ヒルシュマイヤー先生  
(写真1、2とも南山学園史料室所蔵)



写真2) テレビ番組に出演したヒルシュマイヤー先生  
(1970年11月14日 NHK 教育テレビ『経営新時代：提言』より)

ヨハネス・ヒルシュマイヤー Johannes Hirschmeier は、一九七二年から一九八三年まで南山大学学長を務め、在職中の一九八三年六月十六日、早朝ウォーキング中に突然倒れられ、心不全で急逝された。南山大学には二十五年以上在籍し、また学長職在任期間も十年以上に及ぶ、優れた研究者でありまた教育者でもある修道司祭 Father Hirschmeier、その死去から四半世紀を経過した現在、先生の遺された数々の「業績」を、どのように収集保存・分類・評価すべきか、という課題について、本稿は若干の考察を加えるものである。ヒルシュマイヤー先生の遺されたものを見直すことが、業績再評価の契機ともなりうるであろうことを期待し、可能な限り多角的な思考をとって考察していきたい。

## I 「業績」に関する基本情報

### (一) 南山ブレティン

南山ブレティン一六三号「南山学園創立七十五周年記念号」に、歴代学長を紹介する特集があり、「三代目学長ヒルシュマイヤー神父」として業績を要約し、次のように記述されている。

一九七二年より三代目学長に就任したヨハネス・ヒルシュマイヤー経営学部教授は、創立以来の「キリスト教的」「学究的」伝統を継承するとともに、南山大学の国際化を推進、発展させました。対外的に南山の独自性が広く知られるようになり、学部だけでなく大学院の充実期を迎えたのもこの時期です。

七二年の文学研究科仏文学専攻博士課程の設置にはじまり、経営学研究科経営学専攻、文学研究科独文学専攻、神学専攻にそれぞれ博士後期課程が増設され、学部・大学院とも充実した中部地区有数の文系総合大学と

しての地位を確立しました。

八二年には南山学園創立五十周年を迎え、南山大学「国際化プロジェクト」を発足。その当時では最新の設備を持つL1教室、同時通訳の養成にも使用できる視聴覚特別教室、視聴覚ライブラリーなどが設置されたL棟を開設し、視聴覚教育を拡充させるとともに、帰国生徒の受け入れ体制を整備しました。さらに中部地区初となる外国人留学生別科の設立や海外の大学と学生交換協定の締結など、より一層の国際化が推進されました。とりわけ留学生別科は、設置直後よりアメリカをはじめとした諸外国の大学・研究機関から積極的な関心が寄せられ、南山大学の名を世界に示すものとなりました。

## (二) 南山学園七十五年史

南山学園の五十年史である『南山学園五十年の歩み』では、ヒルシユマイヤーに関する個別記述は見られないが、南山学園の七十五年史である『HOMINIS DIGINITATI 1932-2007 南山学園創立75周年記念誌』では、以下の項目にヒルシユマイヤーに関する記述が見られる。

- ①外国人留学生別科（「日本研究センター」）
- ②南山中学校帰国子女特別学級
- ③公会議の対話路線と南山宗教文化研究所、宗文研設立の意義
- ④山の家
- ⑤南山大学の支援団体、南山大学同窓会・友の会
- ⑥ログス・センター

## (三) 経済経営学編『アカデミア』「ヒルシユマイヤー教授追悼号」（一九八四年六月）

一九八四年当時、「経済経営学」の編集で発刊されていた『アカデミア』に掲載された「ヨハネス・ヒルシユマイヤー

教授略歴・業績」に、ヒルシュマイヤーの経歴・業績が網羅的に記述されている。「略歴」には、年譜と「主な役職」が含まれ、業績は、「学会発表」「著書」「論文」「新聞・コラム・寄稿」「講演」の項目で分類され、基本的には、時系列で編まれている。（いくつかの誤記があるので、その部分訂正は必要となる。）

この記録の基となる原資料は、日本人スタッフがレポート用箋に手書きでまとめたデータであり、学園史料室に保存されている。

## Ⅱ その他基本情報の所在

ヒルシュマイヤーの遺したものの、および関連する基本的な情報は、前記Ⅰ項で触れた刊行物の記述内容以外に、学園史料室・大学図書館・宗教文化研究所・学長室に、分散、保管されている。

（神言神学院図書館、神言修道会管区センター資料室には、ヒルシュマイヤー個人の資料は存在していないが、神言神学院発行の雑誌『ガブリエル』にはヒルシュマイヤーの寄稿エッセイが掲載されている。）

### （一）学園史料室

学園史料室に最も多くの資料が、保管されている。

ヒルシュマイヤーの使用していた書類キャビネットに、横向きに保管されていた資料を、配列順序を崩さず、スリール書棚に縦向きに配架している。

リヒト・ファイルで整理されている原資料が、計十三個のファイルボックス（紙製）に「学外活動」と「原稿」

という大分類で収納されている。

ここにヒルシュマイヤーの手稿が数多く遺され、論文用準備草稿、講演レジメなど貴重な資料が存在する。特に一九七九年発刊された小冊子『人間の尊厳のために』を執筆する際に準備した草稿や、ドイツ語で書かれた宗教関連の草稿などは大切に保管されるべきものと考ええる。

論文・エッセイ執筆に関連する参考資料がファイルに分類されているが、そのファイル・タイトルは以下のようなになっている。

Religion · Dignity · Hominus Dignitas · Marxism – Christian · Christmas letter

Business History · Japanese Business History · U.S. Business History · New Industry State · Kindai

Society and Business · Social Ethics

Education · Menschenbild(ung)

宗教・経営史・社会倫理・教育という四つの分野にわたる項目で分類されていることがわかる。

また業績・経歴関連の資料として『AKADEMISCHE AKTIV』というタイトルが付けられたファイルがある。ヒルシュマイヤーの指示の下、日本人スタッフがA4レポート用箋（罫線入り）に隔行で記述した、詳細な資料が含まれている。前記『アカデミア』掲載の「略歴と業績」は、この資料を元に作成されたのであろう。全体の構成は以下の通りである。

① 著書・論文・寄稿（六ページ）

② 講演・学会発表その他（十七ページ）

③ 講演タイトル集（一九七八年から一九八三年まで）

④ Academic Records

⑤ 履歴書

また「学外活動」の各組織・団体役職関連のファイルには、「Engagement」というタイトルが付けられている。前期『アカデミア』資料に列記された事項以外にも就任した役職は存在するので、経歴記述に完璧を期すには点検・補充が必要である。

その他、新聞・雑誌に掲載されたエッセイ・記事のクリッピング、ヒルシュマイヤー逝去時の新聞記事、論文・記事掲載の書籍・雑誌の一部が保存・保管されている。

再整理する前に、そのままの順番で資料に整理番号を付与しておくことが必要となる。保存の状況は、現段階では良好であり、当初の段階での分類整理、また学園史料室での分類保管を担当された方々のご努力は評価されるべきである。

学園史料室にあつて、前記『アカデミア』に掲載されていない資料としては、学生文化活動へのメッセージがある。ヒルシュマイヤーの学内活動として見落としてはならない分野であるので、項目を次に付記する。

学内学生文化活動へのメッセージ：女声合唱団、メールクワイア、野外劇グループ（「受難劇」、上南定期戦、応援団、ハンドボールクラブなどへのメッセージあるいは檄文、定期刊行物『南山スポーツマン』への寄稿

(二) 大学図書館・三宅文庫

ヒルシュマイヤーの蔵書の多くは、大学図書館二階の「三宅文庫」内に移管・所蔵されている。三宅文庫は、東海銀行会長三宅重光氏（当時）の篤志により、一九八二年から一九八三年にかけて準備・開設された、経済・経営



関連書籍を中心とした蔵書を目標として掲げた寄付ライブラリーである。大学図書館栗山課長にお調べいただいた結果によると、一九八三年度三宅文庫開設時に、「ヒルシュマイヤー文庫」より一七二九冊の寄贈があった、という記録が残っている。当時の「ヒルシュマイヤー文庫」目録は作成されておらず、現在の三宅文庫所蔵書の内、どれが「ヒルシュマイヤー文庫」からの寄贈書であるかについては、OPACで逐一調べていくことになる。

寄贈された一七二九冊の行方をすべて探ることは、今となつては困難となつてしまつたが、現在所蔵されているヒルシュマイヤーの著作本の中には、見返しに「ヒルシュマイヤー文庫」という文字が記載された図書請求ラベルが貼られているものもあるので、少なくとも三宅文庫内での「ヒルシュマイヤー文庫」の範囲を確定することは可能である。またヒルシュマイヤー自身の書き込みが残された書籍も、何点か存在するので、研究者にとっては貴重な資料となりうるので、保管には十分な配慮がなされるべきであろう。

### (三) 南山宗教文化研究所

ヒルシュマイヤー生前の蔵書の内、Karl Marx および Communism 関連の英語書籍が宗文研に寄贈され、資料室に所蔵されている。一九六五年版の『Capital』(Moscow Progress Publishers)・一九七一年版の『Karl Marx Library』(McGraw Hill)を初めとして、レーニン、スターリンの著作集や共産主義関連の論文集も含まれており、数点にはヒルシュマイヤーの書き込みも残されている。

### (四) 学長室・大学史料室

学長室には、ヒルシュマイヤー逝去時の葬儀関連の情報中心にクリッピングが保管され、大学史料室には学内刊

行物中心の所蔵がされている。

### Ⅲ ヒルシュマイヤーの履歴について

ヒルシュマイヤーの履歴・略歴については、資料出所によっていくつかの様式があるが、本論では、ヒルシュマイヤーの活動をより実態的に捉えるため、従来の年次ごとの羅列的な履歴ではなく、その生涯を四つの時期に区切り、以下のように年代による画期を試みる。

#### ① 来日以前（一九二一～一九五二）

幼少年期、来日以前の青年期については、資料が豊富ではない。ヒルシュマイヤーが毎日新聞に連載したエッセイ（一九七四年十月～十一月）が、「自伝」として遺るものである。履歴の中では、今後の資料探索が必要とされる部分である。

#### ② 来日から日米間往復時期（一九五二～一九六〇 八年間 三十才代）

一九五二年六月の来日から、一九六〇年ハーバード大学での博士号取得までの、教育期間である。東京の日本語学校における日本語習得、神言会修道院での神父経験、一九五四年からの渡米・留学、ハーバード大学における経済学・経済史専攻、一九五七年帰日後の東京大学研究生時代、ハーバードに戻って博士論文を完成させる時期である。

#### ③ 南山大学赴任から学長就任まで（一九六〇～一九七二 十二年間 四十才代）

一九六〇年四月経済学部講師として正式に赴任し、研究者・教育者として活動する時期を経て、一九六七年教授昇任後、対社会活動、学外活動を活発化させ、学園理事、学長補佐、副学長として学内業務にも精通していく過程

である。主要研究著作は、この時期に出版されている。

④学長としての活動期（一九七二―一九八三年 十一年間 五十・六十才代）

教育者・修道者として学内・学外の双方で、活動が全面的に展開される時期である。特に学外活動として、社会的に意義ある言説・メッセージを発信していく積極的な行動が顕著に見られる。

今後は、包括的な資料収集・整理作業を基礎に、ヒルシユマイヤーの履歴を再整理・確定することが望まれる。

#### IV オーラル・ヒストリーの蓄積

ヒルシユマイヤーの遺業を考察する際、忘れてならないのは、彼に影響を受けた方々また彼に影響を与えたあるいは彼を支えた方々との間の影響過程のトラッキングである。それには彼と関係された方々へのインタビュー・聞き書き、いわゆるオーラル・ヒストリーの蓄積が必要となる。

ヒルシユマイヤーが遺した資料を分類・保存する際、その作業を担われた松風誠人氏、滝田慎吉氏は、お二人とも平成六年に他界されている。またヒルシユマイヤーの秘書として永年務められた加藤しづ氏は、現在ご病氣療養中とのことである。

学内に在籍し、ヒルシユマイヤーと深く関係された教職員、また他大学に在籍されている先生方にもインタビューあるいはアンケートを実施し、オーラル・ヒストリーというカテゴリーとして記録する作業が必要とされる。

今般、ヒルシユマイヤーの生前ご親交が深く、葬儀では友人代表として弔辞を奉読された由井常彦先生（現財団法人三井文庫常務理事・文庫長）との面談が叶い、お話を伺うことができた。由井先生は、ヒルシユマイヤーとの

共著『日本の経営発展』を刊行され、研究・学問上での共同作業を遂行される中で、ヒルシュマイヤーの修道者としての人間性にも触れられ、ヒルシュマイヤーを崇敬していらつしやる先生である。由井先生のお話を記録しておくことが求められる。

## V 研究業績への視角

ヒルシュマイヤーの「業績」を俯瞰する際、研究業績を専門研究分野内に留めることは、彼のホーリスティックな活動領域にはそぐわない。研究者・教育者・修道者・唱導者という多面的な領域を前提として、業績を整理・再分類すべきと考える。

### (一) 専門学問領域における研究業績

ヒルシュマイヤーが「日本経営史」という領域において、最初に「日本経営通史」を発表し、学際的な研究方法を積極的に採り入れ、価値体系と経営との関係を説き起こしたことについては、発表当時高く評価されていた。しかし現在において彼の文献は、頻繁に引用されているとは、必ずしも言えない。ヒルシュマイヤーの発表論文・著作に関する他研究者の評価の変遷についても、資料として収集し、保管すべきものである。他研究者の評価例として二点を、以下に記載しておく。

① 間宏著「The Development of Japanese Business, 1600-1973 に つ いて」(『経営史学』第十一卷 第三号)

② 宮本又郎他著『日本経営史 江戸時代から二十一世紀へ』(有斐閣 二〇〇七年十月)「明治前期の企業家の特質」

の項で、ヒルシュマイヤーの説を「特定の階層ではなく複数の階層にまたがる限界領域の出身者の重要性を説く見解」と紹介している。

## (二) 大学の理念構築・大学の事業創出に関連した手稿の発見・整理

一九七九年九月南山大学長ヒルシュマイヤーの名で刊行された『人間の尊厳のために HOMINIS DIGNITATI』は、神言会の宗教的理念と融合させながら構築された大学の教育理念である。学園史料室に遺されたヒルシュマイヤーのファイルの中には、理念形成の思考過程を探ることができる手稿も存在する。また大学が推進した各種事業についても、事業創出に関連するアイデアを書き留めた資料も散見するので再整理が必要である。

また宗教関係のドイツ語で書かれた手稿も解読されるべきである。

## (三) 講演活動の中で構成される理念体系と分析視角の蓄積

ヒルシュマイヤーは、夥しい数の講演を生前行っている。各講演に際し、彼は個別に手書きで講演レジメ（アジェンダ）を作成していた。日本人聴衆に対し日本語で発語して行う講演であるので、ロジカル・フローを英語で記述しておくことが欠かせないのである。講演内容が刊行物に収載されるケースは数少ないので、今となつては、これからレジメ集が内容を知る上で貴重な資料となる。

遺された資料の中から、彼が構成しようとした理念の体系、および論点の分析視角を探ることも可能である。ヒルシュマイヤーにとって講演活動は、形成過程にある理念を社会的に公開し、その有効性を診断する活動とも言えるであろう。

単独の講演だけではなく、ヒルシュマイヤーは数多くの対談・鼎談も行っていた。対談・鼎談によって、対話者との繋がりをかたちづくることができ、また対話者の談話から知的刺激を受けることもできる。定まった構想とはなっていないアイデアを披露し、対話者から評価を受けることができるのである。ヒルシュマイヤーは、日本人の発想様式を積極的に学び取るため、そのような機会を積極的に活用している。

#### (四) 現代文化を批評したエッセイ

ヒルシュマイヤーは、新聞・雑誌に掲載されたエッセイ・コラム記事も数多く遺っていて、現代日本文化をテーマに文明批評・文化批評を行っている。主な連載エッセイには、中日新聞連載「紙つぶて」(一九七四年一月～六月 全二十三回)、毎日新聞連載「日本文化論」(一九七四年十月～十一月 全十四回)、東洋経済連載「ニッポン時評」(一九七六年 全九回)、毎日新聞連載「視点」(一九七七年一月～三月 全十三回)などがあり、その他単発の寄稿エッセイが多数存在する。前記『アカデミア』の分類では、「論文」の項目に整理されている文章の中にも、エッセイと呼ぶ方が妥当であるものが含まれている。

外国人にとって日本の「随筆・エッセイ」というジャンルは、特異かつ魅力的な領域と考えるようであり(注)、ヒルシュマイヤーはこの文芸形態を採って、日本人に馴染みやすいよう、文化批評・文化批判というメッセージを継続的に発信していた。『ふだん着のニッポン経済』(ダイヤモンド社 一九八一年)が、代表的なエッセイ集である。

(注) 余談ではありますが、外国人で日本文学研究家であったジャン・ジャック・オリガス(一九三七～二〇〇三)が、雑誌『文学』(一九九二年七月号 岩波書店刊)の対談で、日本の近代随筆について、果敢に問題提起を行っていることを付記し、ヒルシュマイヤーがエッセイという形式に魅力を感じていたであろうこ

とを推測する手がかりとしたいと思います。

## VI 研究業績および関連情報の分類

基本情報である、『アカデミア』所収の「業績」リスト（以下「アカデミア・リスト」と呼ぶ）と学園史料室の資料を、比較考察しながら、個々のジャンルに関する論点を述べる。

### （一） 研究著作

「アカデミア・リスト」の内、△学会発表▽と△著書▽、および△論文▽の内、学術ジャーナルに発表された研究論文を包含し、「研究著作」と呼ぶ。

ヒルシュマイヤーの研究著作の中で画期的な研究書と評価されるのは、一九六五年翻訳書として刊行された『日本における企業者精神の生成』である。これは、一九五七年から一九五八年において作成した、ハーバード大学へ提出した博士論文が原型となっている。その一年後、一九六六年十一月の経営史学会において論文「経済発展に関する企業者精神の問題」が発表される。一九六四年以前に、学術ジャーナルに発表した論考には、経済発展あるいは発展段階説に関わるものが多くなっている。

ヒルシュマイヤーの理論形成には、経済発展の理論評価、企業者精神の生成過程分析、経営史の通史的記述という三つの研究課題による方向づけが、当初よりなされている。また価値体系と経済・経営の関係という論点は、一九七一年以降の発表論文に顕著に表れてくる。したがって著作物の分類も、これら四つの観点から再整理すること

とも必要であろう。その作業過程で、理論形成の初期段階におけるシュンペーターの影響、初期の渋沢栄一研究が企業者精神生成の分析に与えた影響など、ヒルシュマイヤーの初期研究活動に関する資料も補えるであろう。また一九六四年十一月設立された経営史学会における、ヒルシュマイヤーの業績評価については、学会会員からの情報によって補足すべき面もあるように思える。

ヒルシュマイヤーの主要著作：

- 1961 「経済発展のための企業家供給」(北野利信訳 『アカデミア』通号32)
- 1963 「経済発展は自由市場体制によるべきか中央計画によるべきか」(北野利信訳 『アカデミア』通号36)
- 1964 *The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan* (Harvard University Press)
- 1965 『日本における企業者精神の生成』(土屋喬雄・由井常彦訳 東洋経済新報社)
- 1965 Shibusawa Eiichi: *Industrial Pioneer in The State and Economic Enterprise in Japan*, Princeton
- 1971 「文化的価値と工業化の論理」(大橋吉久訳 『経営史学』第5巻3号)
- 1975 *The Development of Japanese Business 1600-1973* (George Allen & Unwin Ltd.)
- 1975 「江戸時代の価値体系とビジネス」(第10回経営史学会大会での由井常彦との共同発表 『経営史学』第10巻1号)
- 1977 『日本の経営発展 近代化と企業経営』(由井常彦との共著 東洋経済新報社)
- 1981 *The Development of Japanese Business 1600-1980* (George Allen & Unwin Ltd.)



## (二) 著作草稿

学園史料室には、著作執筆に際しての草稿が数多く遺されている。草稿と完成論文との異同について把握するには、格好の資料である。宗教関連の論考を執筆時、あるいはその準備のために書き残したメモも存在する。

## (三) 教育に関する論考

ヒルシュマイヤーの大学教育を中心テーマとする教育論は、『人間の尊厳のために HOMINIS DIGNITATI』の中で詳しく論述されているが、その他に新聞への寄稿記事としても数多く遺されている。ヒルシュマイヤーの教育論を、体系として構造的に捉え直すためには、これら寄稿記事も視野にいれた再構成が必要となる。

## (四) エッセイ（随筆）

エッセイは、テーマによって次のように分類される。

日本および日本文化に関するエッセイ

教育論

経済時評

エッセイを貶価的に評価することなく、他ジャンルの著作と等価的に位置づけ、ヒルシュマイヤーの遺業の重要な部分として認識すべきである。

## (五) 講演および講演草稿

ヒルシュマイヤーの中部・東海地域を中心とした講演活動は、年次別に以下のような回数となっている。(「アカデミア・リスト」をもとに集計)

1967	3 回	1968	4 回	1970	2 回	1971	1 回	1972	3 回
1973	5 回	1974	16 回	1975	17 回	1976	10 回	1977	23 回
1978	18 回	1979	国内 32 回	海外 5 回	1980	37 回			
1981	31 回	1982	30 回						

この夥しい数の講演を、時系列だけではなく、講演会主催者である学外組織との社会的関係に従って、分類し直す作業は意義あるものである。

この回数には、シンポジウム・鼎談・対談への参加・出席が含まれている。学外有識者との人的ネットワークをかたちづくるのに有効な機会であるので、シンポジウム出席者、鼎談・対談の対話者についての情報も、データとして記録されるべきであろう。

前記の数字には含めていない放送メディアへの出演については、一九六九年八月から一九八二年十月までの間、NHK 総合、NHK 教育の両局制作を中心とする経済・教育に関する番組数が、十七回を数える。それぞれの番組については、番組表の新聞クリッピングが遺されている。

一九七〇年代においてテレビに登場することは、ヒルシュマイヤーの知名度を上げ、結果として南山大学に対するイメージを向上させることに大きく寄与したと言える。

ヒルシュマイヤーの生涯において、特に一九七九年以降、毎年の講演回数が三十回を超えていたことは、彼の肉体にかなりの負担を与えていたのだろう。学外活動をコントロールし、健康により慎重に留意しておけば、急逝は

避けられたかもしれない。

#### (六) 学内におけるメッセージ発信

ヒルシュマイヤーは、学内のスポーツ・文化活動、あるいは上南戦に対しても、激励するメッセージを送っていた。「業績」の中を含めるには、馴染まない内容かもしれないが、教育業績の部分として記録に留めるべきであろう。また構築された大学の理念を、機会あるごとに学生に伝えていった活動についても、可能な限り収集することが必要とされる。

#### (七) 死去・葬儀関連情報

大学葬、死亡広告、新聞・雑誌に掲載された追悼文については、学長室、学園史料室の双方に資料が保管されている。ヒルシュマイヤーの人柄・パーソナリティを偲ぶ手がりとなる情報である。また逝去後に記念事業として施行された記念植樹・記念館（L棟）建設などに関する情報は、学内広報紙『南山』などで追補できる。なおヒルシュマイヤーの墓所は、神言会多治見修道院の墓地にある。

ヒルシュマイヤーと親交の深かった、学内の三人の先生方が寄稿された追悼文は、永く記録されるべきである。

James W. Heisig 氏（現南山宗教文化研究所教授）『In Memoriam』Nanzan BULLETIN No.7 1983

中村 精氏（当時経営学部教授）「ヒルシュマイヤー学長と学問」『南山』第65号 昭和58年7月1日

長坂源一郎氏（当時学長補佐）「ゆかたがけの神父―ヒルシュマイヤー師の思い出」ヒルシュマイヤー死去の翌年、中日新聞に連載されたエッセイ（一九八四年二月二十八日から四月十一日まで全三十一回）は、新聞連載という形

式を借りた伝記である。毎回千字程度の長さのエッセイであった。各回のタイトル（以下に記す）を辿るだけでも、ヒルシュマイヤーの軌跡に触れることができる構成となっている。

- ① はじめに―深い信仰、温かい人柄
- ② 最期―内輪の祈りに多くの人の
- ③ 童心―経験で鍛えた純な魂
- ④ 別れ―途絶えぬ会葬者の列
- ⑤ 週末別荘―手弁当で学生の家
- ⑥ 出家―町中であって『働く』
- ⑦ ヒルちゃん―身近な懐かしい人
- ⑧ 一通の手紙―二十人兄弟の末っ子
- ⑨ しつけ―厳格な母に教わる
- ⑩ 故国―通信兵として前線へ
- ⑪ 努力家―一年で日本語の説教
- ⑫ 猛勉―ハーバードで学ぶ
- ⑬ 広い視野―日本文化の神髄学ぶ
- ⑭ 義理人情―いつも心配り細やか
- ⑮ いとむ―企業者の役割を説明
- ⑯ 日本人の血―危篤を救った輸血
- ⑰ 大学紛争―信念持ち学生と対話
- ⑱ ナグヤー―世界中から留学生
- ⑲ 美と心と―桂離宮に日本を見る
- ⑳ 上南戦―服のままプールに
- ㉑ 八琴会―隣組が大学を応援
- ㉒ 宗教文化―多くの財界人が理解
- ㉓ ドラファーン―名古屋に強い愛郷心
- ㉔ 励ます―授業や研究を大切に
- ㉕ 後継者―心くだき育て、招く
- ㉖ 国際化―外国人と共同の村を
- ㉗ 人間として―精神的価値の回復探る
- ㉘ 募金活動―国際交流の拠点めざす
- ㉙ 体の不調―募金などで疲労重なる
- ㉚ 路上の死―神の意に従い日本で
- ㉛ 中日文化賞―死の三週間前に受賞

(八) 団体・機関の役職就任と募金活動に関する資料

それぞれの組織との関係については、個々にファイルが作成されている場合が多く、学園史料室の保存資料によって、その詳細が把握できる。ヒルシュマイヤーの資質が幅広い業種・組織から評価されていたことの反映である。彼は役職就任を、南山大学に対する学外の理解を向上させる機会として捉え、社会的な関係の中で大学への支持・支援を拡張する可能性を探っていたのであろう。

宗教文化研究所設立時に行った企業に対する協力要請活動、中部地方を国際交流の拠点とすることが目標となった「国際化プロジェクト募金」、企業からの支援に負う奨学金制度の創設活動などに関する資料も、大学と名古屋に位置する企業との関係を知る上で貴重な情報であるので、整理・保存すべきと考える。

(九) 個人情報情報の保存

学園史料室には、書簡・写真(個人・集合)も数多く保管され、少数ではあるが、映像資料も存在するが、ほとんどが未整理の状態にある。個人情報については、十分な配慮をしつつ、保存の観点から再整理すべきと考える。

## VII ヒルシュマイヤー・アーカイブの可能性

これまで記述してきたように、ヒルシュマイヤーの遺した「業績」は、研究者・教育者・修道者という三つの役割を担う中で、領域を超えて幅広く展開されている。アカデミシヤンの業績は、あくまでも研究業績に限って記録されるべきもの、という見解にも一理はあるが、ヒルシュマイヤーの場合は、上記三つの役割に対し、それぞれ十分なる功績が認められるので、「業績」は全人的に把握し、多角的に考察すべきである。

多角的な考察にあたり、本来であれば資料を統合し、一部署で一括保存・管理すべきであろうが、それには多大の人力・時間・予算を要するであろうから、現行の保管態勢を維持しつつ、WGO上でヴァーチャルにビブリオグラフィあるいはアーカイブを構築していく可能性を探っていくことになろう。

資料は、概ね以下の四つの方向に存在している。

- ① 既に刊行されている書籍・ジャーナル・新聞・雑誌の中に記載されている内容
- ② 南山学園の学園史料室に十分整理されない状態で保管されている資料
- ③ 大学図書館・宗教文化研究所など南山大学内の複数の部署に散在している資料
- ④ テキストとして定着していないが、オーラル・ヒストリーなどの方法で見えてくるであろう新資料

当面の作業は、学園史料室に保管されている資料の再分類を端緒として、その後の工程を計画することになるであろう。

ヒルシュマイヤーの行った講演には、一九七〇年代から将来にわたる日本の社会・経済に関する論点が数多く含まれており、また経営史の論考は、企業の経営倫理・企業経営者の価値観・企業の社会的責任という二十一世紀課

題に示唆を与える内容に溢れている。「精神的価値の回復」という人間的課題の解決方向を探ろうとする時、ヒルシュマイヤーの遺した業績に触れ、その意義を再評価することが求められる。

謝辞…ご多用中にもかかわらず、ヒルシュマイヤー先生のお話を聞かせていただいた由井常彦先生、また本稿執筆にとりかかるにあたりご教示いただいた東京大学経済学部和田一夫先生、南山大学宗教文化研究所 James W. Heisig 先生、経営学部村本正生先生、経済学部川崎勝先生、大学図書館栗山義久課長、そして学園史料室、大学史料室、学長室の方々にお礼申し上げます。

be possible to reorganize his achievements into a virtual ‘Hischmeier’s Archive’ according to the following four directions:

- 1) Professional research results and peer reviews in the discipline of History of Japanese Management
- 2) Creation of basic philosophy for education and educational institutions
- 3) Idea generation and agenda setting in the process of giving numerous lectures
- 4) Essay writing to criticize the society and culture of current Japan



# Insights into Multidirectional Achievements of Johannes Hirschmeier (1921-1983)

HIROSE Toru

## Abstract

The late Johannes Hirschmeier worked as President of Nanzan University from 1972 to 1983 and was a capable researcher (Doctor), an earnest educator (President) and a respectable monastic priest (Father). He achieved the historical and remarkable works in each of the above three roles. Therefore a holistic approach is necessary to grasp the whole aspect of his distinguished activities. This thesis is a preliminary study to collect, retrieve, classify the records of those achievements.

Nanzan Gakuen and Nanzan University has stored the basic information and the various data concerning the life and history of Hirschmeier.

The most important data have been retrieved in Historical Record Section in NanzanGakuen. The original data are arranged in 13 file boxes and classified into the two categories of ‘Drafts’ and ‘Out-of-University Activities’. The hand-written drafts of theses and essays, the agenda of his lectures and the thoroughly-prepared drafts of ‘Hominus Dignitas’ of 1979 version are contained in ‘Drafts’ files. The files of ‘Out-of-University Activities’ are full of information on his engagement with the Japanese and Nagoya society. There is another file titled ‘AKADEMISCHE AKTIV’ that could inform us of a perfect list of Hirschmeier’s lectures and writings.

His collection of books that are stored in the University Library’s Miyake-Bunko and Institute for Religion and Culture need to be cataloged and rearranged. The oral histories of his acquaintances could be collected to understand his personality.

Based on the successive study of the above information resources, it might